

我國最初の幼兒教育者 豊田芙雄先生の米壽

氏 原 銀

我國最初の幼兒教育者豊田芙雄先生は本年米壽の八十八歳の高齡を重ねられ、此お祝の記念として先生の常により



(影近御の生先芙雄田豊)

置かれしお作歌の中より米壽の数の八十八首を集められ、之れを思ひ出ぐさと題する小冊子として賜りました。之れを見るに何れも結構なる玉吟にして先生の斯道に秀でられたるを感嘆いたします。

豊田先生は皆様も御承知ならん。我國幼稚園の、今より五十七年前の明治九年十一月、東京女子師範學校（現女高師の前身）附屬として創設せられし際、我國最初の保姆として、其創業時代に於ける種々の不便に耐え幾多の苦心を重ねられ其供給上を整へられて、今日幼稚園の基礎を立てられし、其御功績を尊とく仰ぎつゝ米壽の祝意を表し、此思ひ出ぐさの玉詠を有意義を以て皆様と共に拜讀すべく、こゝに申述ぶる事いたしました。左に

思ひ出ぐさ

緒言

不肖英雄今年八十八の馬齢を算へまして辛くもうこめいて居りますが唯々人様の御厄介になる計りでほんたうにお氣の毒に思つて居ります。それにも拘はらず大方の皆様からいろ／＼御心をそゝがれ世に謂ふ米壽てふことをお祝ひ下さいまして何と御禮の言葉も御座いませむ。就きましては何か感謝の意を表したく存じましたがよき思ひつきもなきものから常に詠み置きたる腰折れ歌を積みたる歳の數ほどあつめてそれを記念の小冊子となして知己の方々に參らせ御一笑に供せんと思ひつきました。さはあれ極めて拙くふつつにて且つ咄嗟の思ひつきとて耻かゝやかしう考へますが如何にせむ何事もいたらぬ老の身のなせるわざなれば其點見逃がし賜はりて御邊の折に一讀の榮を賜はらば本意之に優りたる事なしと存じます。

こゝしさもしらてこえ來ぬ米の山

昭代のめぐみの杖にひかれて

時に昭和七年冬十月

田見小路寓居に在りて

從七位勳六等豐田英雄しるす

米壽記念 思ひ出ぐさ

春之部

新年の雪

あら玉の年ほき人のさして行くかさおもけにもつもるし
ら雪

新年會友

へたてなく老も若きもあら玉の年をことほくけふのうれ
しさ

春草

里人にふまれながらも生ひ出でて春にそむかぬ野邊のわ
かくさ

暮梅

人は家に鳥はねくらに入りし後にをしくもかをる野邊の

梅か香

汽車観梅

梅の花また見ぬさきにかをるなり小汽車のまことに風のお
くりて

夏之部

野百合

草刈もからてのこしゝ野つかさにかをりはなちて白百合
のさく

田植

早苗草ふしはたつらむ田ひとらよはや植えわたせ雨はふ
るとも

水郷螢

里川にうつるもをかし青やきにすかるほたるの影もゆら
きて

河骨

千波沼ぬなはとらむとさをさせはまつ目にとまる河ほね
のはな

蓮

月夜にはこかねの玉と見ゆるかな蓮のうき葉につゆのま
ろひて

都時鳥

宮ひとも今のひとこを聞きつらむちよ田の森の初ほとゝ
きす

茶摘み

木の芽つむ時來にけりと里の女かあしたゆふへに行きき
賑ふ

夏田家

夕立のはるゝを待ちて小山田のひえ草ぬかむ茂りあへぬ
まに

山家忘夏

手にむすぶ清水はきよし風すゝし山にのかれしかひそあ
りける

泉忘夏

湧きいつる岩かね清水むすひつゝやすらひ居れば夏なか
りけり

雷箱

夕立のはれたる後もかみなりてひかるもすこき星つく夜
かな

夏 山家

せみのこゑ松ふく風もきくなれてさひしともなき山のし
た庵

夏 休

涼しさのいつこはあれと夏休みまつふるさとの山にあそ
はむ

夏 窓

青葉ふく風をすゝしみ窓によりて歌おもひつゝしはしま
とろむ

秋之部

蛸

をか越の木の下かけにやすらへは秋つけ顔にひくらしの
なく

新 月

山の端の木すゑはなれて三日月のかけのほのめく夕へさ
ひしも

雲 間 月

雲間もる月こそものを思はずれ世のわひ人にあらぬ身に
さへ

撰 虫

古しへのためしはおきて我宿にふさはしけなる草ひはり
なく

二百十日

しなとへの神なあらひそ秋の田のをしねは今そ花さかり
なる

薄 露

糸すゝきわきそふ露をちらしつゝさひしさまねくあきの
夕暮

上 鼓 月

夕月夜ひかりはいまた添はねとも秋のあはれはこれより
そしる

秋江釣魚

ひ沼うら廣えのなみにつきてりてほらつる翁のさをゆら
く見ゆ

秋 虫

うなわ子か軒につるし、籠の中をおり殿にしてはたおりのなく

冬之部

霜 夜 月

かけさへもこぼる心地すおき渡す霜にきらめく冬の夜の

初 冬 旅

旅衣かさぬるまでに寒きかなやまかせすさむふゆの初そ

山 家 初 冬

聞きなれしみねの松風音かへて木からしすさむ冬はきに

落 葉 埋 路

朝夕にかよひなれたる小みちすらふみまよふまで落葉ち

雜之部

文 書

かなめともなるへきふみの巻々は心してこそよむへかり

けれ
かすおほく書をよむとも何かせむたゝしき人のみちを踏

歐 洲 戦 亂

まかつ神如何にあらふる三年越西のくにはらいくささけ

國 體

ひの
天地のひらけはしめしかみよゝりもとゐたゝしき我が大

蘭 糸

やしま
まゆこもるくはこの虫のはく糸の御國のいとをひきいた

紙

しける
むら肝のこゝろをうつす紙なくはおもふことゝ何にし

るさむ
紙ならば漉きかへさむを人こゝろ薄くなり行く世を如何

にせむ

古書

これなくはなにと昔をたとらなむたうとかりけり古きふみまき

鈴

たまちはふ神の御まへに鈴ふりて祈るは御代のみさかえにして

乳母

はゝそはの母の代りてはくゝめるちこの乳母はゆるかせにすな

蚊帳

幼な子の眠れるさまを蚊やこしにみまもりつゝも母は衣ぬふ

木の冬三つ

三輪の山しるしの杉かしめはえてきりのまよひに見えかくれする

杖

鳩の杖つくもつかぬもさもあらはあれ我身いたくも老いにしものを

釣鐘

つき出す鐘をかそへて老か身はねさめの友とまつ聞きにけり

力

集むれはいかに重きもさゝくらむ力あはせてはけめもろ人

太刀

武士のとりはく太刀のつかの間もみかけやみかけやまとたましひ

寄水述懐

谷川のほそきなかれもうみに入るかくしもあらん人のゆくすゑ

嬉しきもの

うれしさのいつれはあれと恙なくうま子生れてうたけする時

蜻蛉

日本の本のかたち似るとこの虫にあきつてふ名を命せそめけむ

題しらす

ちりひちも積れば山となりぬへし僅かなりとてゆるかせ
にすな

山家夢

山住みはうき世はなれし心地して夜な／＼結ふゆめもの
とけし

名所松

唐崎の松もいのちにかきりあれやをしくも枯れて名のみ
残れる

蟻

日ねもすにやすらひもせて餌をはこふありの心に我はな
らなむ

遊女

川竹にまかする身にも人なみにをしへの庭にかよふ御代
かな

平政子

かちえたる鏡のゆめに行く末をてらし君のこゝろさか
しも

憐れなるもの

あはれさの何れはあれとたらちねの母にわかれしをさな
子にして

治世文事興

治まる御代のさかえのかしこさよ文のはやしは日々にし
けりて

桐樹

庭にうるし桐は早くも立ちのひぬ箱にやきらむ火桶にや
せむ

木の名四

みねの松ふもとの杉生きりこめてせとの板に鶺鴒かねそす
る

題しらす

をさな子に昔はなしを聞かさむにまつくすの木を君をか
たれり

電話機

言の葉も色もさたかに聞ゆれとすかた見えぬか物足らす
して

西行法師

みちのへに流るゝ清水音きよく柳のかけは今もしたはし

風呂敷

しら玉も眞玉もともに風呂しきに包みおくこそゆかしかりけれ

白さき

白鷺かみの毛かつきて池の邊に立てるすかたの繪に似たる哉

銅像

つくしたるいさをもたかく仰かなその名とゞもにのこる銅像

忠

玉はあれとこかねはあれと尊ときはふたこゝろなき大和たましい

平重盛

君につくし親を思へち真心はのちの世までのかゝみなり

けり

何の折にか

ぬさととりて常磐の神にいのるかな我かしきしまの道のかえを

涙

なみた川よとみなければうき人のうきてふたねは流し果つへし

寶

敷おほき學ひのわさにぬけいてし人こそ國のたからなりけれ

玉

みかゝすは玉も光りのそはすして石にかわらにひとしかるらむ

夕くれ

夕からすねくともとめて城山にかへる親子を誰れかわくへき

題しらす

世のさまは移り行くとも國を思ふ臣のまことははらさらなむ

交友

此君のすくなるふしをこゝろにてともをえらひてまはしは
れよ人

一徳會の講話をきく

人皆のこゝろひとつにくいの爲めまことつくせと説くか
嬉しさ

名 所 瀧

三吉野のよし野の瀧のしら糸ははなのさく頃人によるら
む

社 頭 風

草も木もなひきふしたる大御代の風なほきよき神のひろ
まへ

篠田翁の喜壽の賀に寄神祇祝をよめる

天地のかみの御たまのさきはひておきなの榮えかきりし
られす

故文女學校を詠める

まなひやの庭にしけれるひめ松の千歳の色の見ゆるうれ
しさ

大正五年二月松原神社新たに造營なりたるとき
奉納の歌請はれけるによめる

つくは山は山のかけにはたあけてつくしましぬるむかし
忍はゆ

今もなほ襟元さむく身にそしむみこしの松の雪のしつれ
は

一たひはいすかのはしと思ひしにとひ立つほとこの今のう
れしさ

いさをしも今あらはれて松原の宮居あらたになりける
かな

大御代の千代のさかえは松原のかみも守りておはします
らむ

新宮にしつまりましたまもりませその松原のときはかき
はに

治まれる御代となりてそ松原のまつぶく風のおとののと
けさ